

別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 犯罪に対するリスク認知と不安に関する環境心理学的研究

(An Environmental Psychological Study on Risk Cognition and Fear of Crime Victimization)

氏 名 小嶋 理江

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、潜在的被害者の認知過程に着目し、多面的に犯罪に対するリスク認知と不安に関係する諸要因を明確にするための環境心理学的研究を行ったものである。第1章では、我が国における犯罪情勢の変化、犯罪に対する不安が注目されるに至った経緯、これまでの犯罪不安研究を概観した。犯罪不安研究において、1) 定義や用語の曖昧さ、2) 構成概念の曖昧さ、3) 測定 of 曖昧さ等の議論が続いていることを踏まえ、本論文の目的を、第一、犯罪不安研究における問題点の解決として、犯罪不安として測定しているものは何かを明らかにすること、第二、犯罪不安喚起に関わる環境要因はどのようなもので、どの程度影響しているのかを明確にすること、そして第三、犯罪に対するリスク認知と不安および対処行動はどのような関係にあるのかを明らかにすることであることとした。本論文における犯罪不安概念として、自分には関係なく犯罪が起きそうであるという個人の中で客観性をもった客観的犯罪リスク認知と、自分に降りかかるかもしれないという個人の中で主観性をもった主観的犯罪リスク認知、主観的犯罪リスク認知に伴う不安という情緒的反応の変数を想定することを述べた。

第2章では、より現実的より自然な状態における、実体験としての不安の抽出を自由報告で試みた Nasar & Jones (1997) の事例研究に倣い、フィールド実験を行い、犯罪不安を喚起する環境要因の特徴について検討した。実験協力者である大学生にとっての身近な生活空間である大学キャンパスを舞台に、定められた評定地点において環境評価を行った。その結果、見通しが悪くなるほど、誰かが潜んでいそうな植え込み等があるほど、自分が逃げられそうにないほど、不安が高くなることが明らかとなった。性別に関わらず、隠している場所 (Hide) が最も不安に大きく影響した。男性は自分が逃げることができるかが判断に影響を及ぼし、女性は自分が逃げられそうかと見通しの良さが同程度の影響であり、環境から得られる情報を注視するなどの性差が確認された。

第3章では、具体的な要因の効果を確認することも必要であることから、実験室研究を試み、犯罪不安喚起に関わる要因の操作の可能性を検討した。まず、3.2節では、実験室における画像評価とフィールド実験で得られた実際場面における評価の関連性を確認するため、フィールド実験の評定地点の画像を用いた画像評価の実験を試みた。評価パターンの一致が確認できたことから、画像を用いた犯罪不安の実験室実験の可能性を示した。不安高場所と不安低場所の画像を用いて、次の実験を計画した。

3.3節では、「犯罪多発地域である」という先行情報の有無によって、環境に対する印象評価が異なるかを検討した。その結果、犯罪情報にかかわらず手がかりとなる環境要因が揃っていれば不安が喚起されることが明らかになった。さらに、自分が被害に遭う可能性が最も犯罪不安を説明していることから、自分が被害に遭う可能性である主観的犯罪リスク認知が、不安評価に強く関係していることが明らかとなった。

3.4節では、ポジティブもしくはネガティブな空間情報の提供が、環境に対する印象にどのように影響するかを検討した。不安 (幽霊等の漠然とした嫌悪感)、安心、人の存在 (ポジティブな人の存在と援助可能性)、事故災害 (事故や災害の可能性と安全性)、犯罪不安 (主観的リスク認知とそれに伴う情緒的反応) の因子を抽出し、ポジティブ情報とネガティブ情報間、性別間における環境評価の差異を示した。自分自身が犯罪被害に遭う可能性よりも、自分以外の他者が被害に遭う可能性を高く評価していることも明確にした。

第4章では、フィールド調査と画像評価実験による一連の研究を実施し、犯罪に対するリスク認知や犯罪不安に関わる環境要因に着目した。まず4.2節では、身近な生活空間において、調査協力者が犯罪不安を感じる (もしくは、不安を感じない) 場所

を撮影、評価してきてもらうというフィールド調査を実施した。撮影された写真を分析した結果、自然監視性と閉塞性の軸が抽出され、不安喚起の高低を説明することができた。隠れる場所の存在（Hide）が、不安に最も影響し、2章の結果を支持した。さらに、潜在的犯罪者が隠れることができそうな塀や植え込み等の存在が多いほど、人の視線が少ないほど、先まで見える見通しが悪いほど不安が高く、逆に、塀や植え込み等の存在が少ないほど、人の視線が多いほど、見通しが良いほど、不安が低くなることを示した。

続く4.3節では、4.2節で得られた不安高場所と不安低場所の写真を用い、フィールド調査の協力者とは別の実験協力者に対し、環境評価の実験を行い、犯罪に対するリスク認知と不安の評価の差異を検討した。その結果、可避性（自分が逃げるのに障害があるような環境か）、自然監視性（ポジティブな人の存在や明るさ）、犯罪不安（主観的犯罪リスク認知とそれに伴う情緒的反応）、客観的犯罪リスク認知（犯罪が起きそうであるという犯罪発生可能性の主観評価と隠れ場所の存在）の因子を抽出し、不安高場所と低場所で異なる環境評価であることを示した。さらに、自然監視性と犯罪不安では、不安低場所の評価が同様であるのに対し、不安高場所の評価になると、女性の方が、より自然監視性を低く評価し、犯罪不安をより高く評価するなどの性差が明らかとなり、性差が認知プロセスの規定因として重要であることを指摘した。

第5章では、不安や犯罪被害見聞、普段の行動範囲等について、白地図上に自由に描くという手法で調査を行ない、切り取った一場面としての空間に対する評価ではなく、個人の認識による様々な空間的な広がりについて検討した。身近な空間である大学キャンパスを用いて、そのキャンパスを利用する大学生に調査協力を求めた。客観的犯罪リスク認知や漠然とした不安などの空間的な広がりを視覚的に捉えることができた。安心な空間は日常的な行動範囲と類似する傾向があるのに対し、犯罪に対するリスク認知や不安および被害見聞箇所が空間的な広がりを持つことを確認した。「あの辺りで犯罪が起きたらしい」といった曖昧な情報の伝達が、認識に空間的な広がりを持たせることを指摘した。犯罪リスク認知はあるが、安心な場所であると認識している場合には、不安ではないと捉えられるなど、リスク認知と不安の不一致があることを明らかにした。

第6章では、学生に対する調査を行い、犯罪リスク認知と犯罪不安および対処行動との関係、主体要因との関連性について検討した。対処行動は、男女で異なり、女性は客観的リスク認知の有無で特徴付けられ、男性は犯罪不安の有無で特徴付けられることを示した。さらに、身近な他者の被害見聞では対処行動は喚起されにくく、自ら

が被害に遭うことで対処行動を行う可能性、時間が経過することで不安や対処行動が低下するといった時間的近接性の影響などを明らかにした。犯罪に対するリスク認知と不安、そして対処行動の関係性を捉える上で、性差は重要な要因であること、自分に降りかかるかどうかは別とした客観的犯罪リスク認知と、自分にも降りかかるかもしれないという主観的犯罪リスク認知を分離することにより、対処行動へのプロセスの差異が明らかになることを指摘した。

第7章では、前章までの研究を踏まえ、地域住民に対する大規模な意識調査を実施し、包括的なモデルを検討した。その結果、性別に関わらず、対処的行動は、犯罪がおきそうだという客観的リスク認知から、自分自身に降りかかるかもしれないという主観的犯罪リスク認知に伴う不安を介して喚起されることを示した。客観的犯罪リスク認知が喚起されても、具体的な行動は行わないという、1章で提案した犯罪不安概念の妥当性を確認した。男性は、そもそも客観的犯罪リスク認知自体が喚起されにくく、女性は、自分自身の犯罪被害経験や被害見聞の間接的影響などにより、リスク認知は喚起されやすく、犯罪不安喚起のプロセスにおける性差を明らかにした。

第8章では、一連の研究を踏まえ、提案した心理モデルの検討、犯罪不安喚起に関わる環境要因の検討を行い、本論文の課題と応用可能性について論じた。

8.1節では、客観的犯罪リスク認知からは対処行動は喚起されず、主観的犯罪リスク認知から対処行動が喚起されるという認知と行動の流れの構図は男女同様であるが、プロセスには明らかに性差が存在することを示した。男性は、そもそも犯罪に対する関心が高くないため、客観的犯罪リスク認知が喚起されにくく、女性は、客観的犯罪リスク認知が喚起されれば、主観的犯罪リスク認知も喚起されやすいことを明らかにした。得た結果により、客観的犯罪リスク認知と主観的犯罪リスク認知とそれに伴う不安という情緒的反応で変数を想定することの妥当性を確認した。

8.2節では、隠れ場所の存在、見通しの良さは、安定した影響要因であり、その環境によって、可避性、明るさが影響することを示し、さらに人や車などの状況要因のポジティブな側面とネガティブな側面を確認した。環境から提供される情報の受け取り方における性差の重要性を示し、単純な効果の比較検討だけでは、ハード面に対する有効な提案は難しいことを指摘した。

8.3節では、残された課題について言及した上で、潜在的被害者の視点から、犯罪不安喚起のプロセスに焦点をあて、客観的犯罪リスク認知と主観的犯罪リスク認知という新たな概念を導入し、不安および対処行動の関係性における明確な男女差を明らかにした本論文の重要性を論じた。